

法然上人讃仰会

合併号

2010

monthly
JŌDO

July

August

波 願
國 生



海

海は とっても 大きいよ
 そして とっても 優しいよ
 時には 津波になつて 私達を襲うけど
 それでも 海は 優しいよ
 海を 見ながら 深呼吸したら
 嫌な事を 全部波が
 さらうて行つてくれる気がする
 大きな 波の音が
 「頑張れよ」 って 言ってくれるような 気がする
 海 ありがとう。

表紙の人と書

北村宗介・書家

『浄土』2010年表紙の



1958年静岡県生まれ。北海道大学卒業。書詩家木村三山に師事、書、篆刻を学ぶ。
 宮部みゆき著『孤宿の人』、火坂雅志著『軍師の門』、第140回直木賞受賞山本兼一
 『利休にたずねよ』等、題字揮毫多数。
 筆一本書法ライブ「辻書法」を各地で公演。

7・8月の書

がんしょうひこく

願生彼国

かの国に生まれることを願え

それほどまでに素晴らしく、理想的な
 国である極楽世界に私たちはまず、行き
 たい、生まれたいという願いをおこせと
 お釈迦様はおっしゃっています。

私たちに対して、繰り返し述べられる
 この言葉は、お釈迦様の一番言いたい言
 葉のひとつかもしれません。（編集部）

東京・町田

勝楽寺

寺に歴史あり

人々に信仰あり

日本の

心の故郷を紀行する

寺院紀行

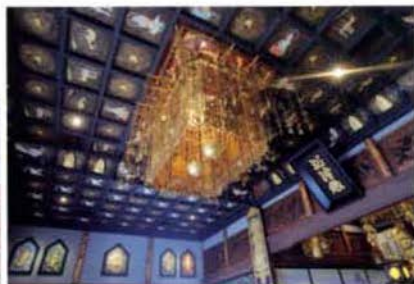


昭和3年に建立された勝楽寺本堂。平成21年の境内加葺大整備で場所を移動、院号である紹隆殿の額が掲げられたこの本堂の下には誕生殿という法要やイベントにも利用できる多目的ホール、そして礼拝堂と舍利堂がある。勝楽寺第36世茂田真澄住職と奥様の孝子夫人。





勝楽寺本尊阿彌陀如来立像。胎内文書が発見され、勝楽寺開基となる三橋新右衛門の分家である三橋喜兵衛が元禄年間に主家である大石家の菩提寺からこの仏像を遷座したことが記されていた。



勝楽寺の本堂内は勝楽寺開基三橋新右衛門の子孫であり、檀家総代である三橋國民氏作品で荘厳されている。内陣の襖絵、外陣の天井絵、天蓋など数十点が三橋氏の手によるものである。



無量寿の塔の上の相輪は古代甲骨文「無」を形象化し、仏教における無窮の世界を表したものだ。これも三橋國民氏の作品。



無量寿の塔は地上9階地下1階で、外壁は花崗岩。耐久性とメンテナンスフリーにこだわった建物になっている。日本の伝統色である朱、群青、緑青の三色に塗られたロッカー墓は落ち着いたたたずまい。

無量寿の塔の屋上から見た勝楽寺境内。案内版（下）には、右手の斜めの道路と交差点左右に延びる道路で境内が3つに分断された地図が書かれている。正面に見える白い建物の右手に昔のJR原町田の駅があった。



JRと小田急線が交差する町田駅。昔は駅が離れていたのので、通勤通学の利用者がJR駅と小田急駅の間を走る道があり、かけあし通りと呼ばれていた。

浄土

2010/7・8月号 目次

カラ・グラビア寺院紀行 東京・町田 勝楽寺	撮影=タカオカ邦彦	1
いのちの授業	対本宗訓	6
寺院紀行 東京・町田 勝楽寺	真山 剛	12
連載小説 渡辺海旭	前田和男	20
会いたい人 桂米團治さん③	関 容子	30
響流十方	袖山榮輝	38
法然上人をめぐる人々	石丸晶子	42
Jフォーラム		55
浄土誌上旬会	選者=増田河郎子	56
マンガ さっちゃんネッ	かまちよしろう	59
編集後記		60

表②茜の詩.....新納 茜

表③教えと法話.....生野善應



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

特別連載

いのちの授業

①

自らの体験を通してその
ありのままの真実に新たな
仏性の花を咲かせていく営み

僧医 対本宗訓

僧医 対本 宗訓 (つしもと そうくん)

1954年 愛媛県に生まれる

1979年 京都大学文学部哲学科卒業
京都嵯峨天龍寺僧堂にて修行
天龍寺派前管長平田精耕老師
に嗣法 室號は岫雲軒
国内およびヨーロッパにて
禅指導や講演などの宗教活
動を行う

2000年 帝京大学医学部医学科入学

2006年 帝京大学医学部医学科卒業
医師国家試験合格し医師免許
取得

現在 内科医・僧医として活動中

著書

「坐禅（いま・ここ・自分）を生きる」

春秋社 1999年

「禅僧が医師をめざす理由」

春秋社 2001年

「坐禅（いま・ここ・自分）を生きる」

新装版 2006年

「僧医として生きる」

春秋社 2008年

「枯れて死ぬ仕組み」を知れば心穏や
かに生きられる

KAWADE夢新書 2010年

私は四国の山間にある小さな寺の息子に生まれました。私が物心ついてより、母に連れられて何度か夏に祖父母宅を訪ねましたが、海辺にあるその家は磯の香りに満ちており、山家住まいに慣れた私にとっては、枕元にまで遠く近く響いてくる潮騒の音に心驚かされ、夜半までなかなか寝つけなかったことを記憶しています。

その夏もいつものように、都会から数家族が帰省してきて、祖父母の家は賑わっていました。蟬の声が喧しい昼下がり、祖父は数人の孫の中から、なぜか私だけを連れ出して裏庭にある鶏舎へとやってきました。それほど広くもない鶏小屋でしたが、大小合わせて十数羽ほども飼われていたでしょうか。祖父はツカツカと中に入っていたかと思うと、突然の闖入者に驚き逃げまわるなかから両手に一羽づつ、羽をばたつかせて暴れる鶏をつかんで外へ出てきました。

祖父は手にした包丁を振って生贄の首に次々と刃を入れるや、素早くその上から大きなバケツを伏せてしまいました。断末魔の叫びをあげながら羽をばたつかせるその動きもしだいに弱まっていき、やがて静かになった頃合いを見はからって祖父がバケツを取り去ると、あわれ二羽の鶏は血だまりの中にこと切れていたのです。

「お前はお坊さんになるんやったな。そんなら、ちゃんと見とかなあかん。」

いささかきこちない手つきのようでしたが、祖父は次々と羽を毫り取り、先ほどの包丁で腹を裂き、水道の水で血を洗い流しながら丁寧丁寧に腑分けしていききました。やがて一連の作業が終わると、その一部始終を凍りつくように見つめていた私に、

「このことは和尚さん（私の父）には言わんでいいからな」

と一言残して、ボウルに山盛りの食材をかかえながら祖父は母屋の台所へと帰っていったのでした。

もちろん、その日の晚餐は豪勢なトリ鍋です。大人も子供も、皆われ先にと箸を伸ばし、鶏肉をつついて舌鼓を打っています。にぎやかな団欒に目を細めながら満悦している祖父母のかたわらで、私はといえば、昼間鶏舎の前で繰り広げられた屠殺の惨状を思い起こして箸が全然進みません。ぐつぐつと滾る大鍋の中で鶏の卵巣の表面に大小の黄身がへばりついている様子は何とも薄気味悪く、のちのち悪夢となつてうなされたほででした。

祖父はいったい何を思つて私にあのような場に立ち会わせたのでしょうか。寺の人間は殺生などしてはならないというならば、生臭く罪深い殺生の現場など見せない配慮がふつうかもしれません。しかし祖父は他の孫はそのまま遊ばせておいて、わざわざ寺の子の私だけを引き連れて、私の目前でその日の晚餐のために二羽の鶏を屠ったのです。この夏の思い出は決して心地よいものではなく、私は子供心にできるだけ記憶を抑圧して意識しないようにしていました。

祖父の真意に気づかされたのは、実はそれから三十年以上も経つてからのことでした。

2

長じて私は青春の十数年間を禅の修行僧として過ごし、やがて思うところあつて四十半ばにして医学を学ぶ身となりました。医学部での授業は一見、宗教とは全く無縁のようではありましたが、仏教と生命科学の響き合いに気づかされることがよくあり、僧として生

命に対する見方をより深めることができたことは大いなる所得でした。そういった観点から、私は食をとおした生命観について講演などでもよくお話するようになりました。

禅寺ではよく精進料理が供されます。精進とは正しい道に努め励むことですが、それと料理といったどういう関係があるのでしょうか。

私に言わせていただくならば、肉や魚を使わないから精進料理なのではありません。あるいは、肉や魚などの生臭を食さないから持戒堅固な清僧高僧なのではありません。私たちはたとえ肉魚を口にしないとも、米や野菜を食わずにはいられないはずで、いっぽうで、不殺生戒があるから肉や魚を食ってはいけないのだという指摘もありますが、殺してはならないとされる生命とはたして肉や魚など、つまり動物の生命だけなのでしょうか。

仏教では生命を「衆生」、すなわち「生きとし生けるもの」ととらえています。要するに、動物も植物も、果ては微生物にいたるまで、すべての生き物にいのちとしての隔たりを認めないのが仏教的な生命観だと言えます。実はこれは現代の生命科学が提示する生命観と何ら矛盾はないのです。

私たちの生命の根源は太陽エネルギーです。太陽光が緑の葉に降りそそぎ、葉緑体で光合成を行うことで植物の体内では栄養素が生み出されます。この養分は植物自身の体を養い維持するエネルギーにもなりますが、その植物を食べる小動物の栄養にもなっています。この草食の虫や小動物をより大型の肉食や雑食の動物が次々と捕食して、いわゆる食物連鎖がかたちづくられることは皆様もよくご存知のとおりです。

繰り返しますが、私たちは動物性の食品を食べなくても、米や野菜などの植物を摂らずには生きていけません。これはどんな清僧高僧といえども同じことです。動物と植物の生

命に隔たりがないことを考えると、私たちはどうあがいてみても他のものの生命を頂かずには生きていけないのです。換言すれば、私たちの生命は他のものの生命の犠牲のうえに成り立っているとも表現できるでしょう。

地球上の生命が太陽エネルギーを根源とした大きな大きな生命のつながり合いの中に生かされている、まさに縁起的な存在であることに思いをめぐらせ、食の恵みをおとして捧げてくれた他の動植物の尊い生命に感謝して、一日一日を人としてせいっぱいに努めて生きようとするならば、たとえお肉やお魚をいただくことも、これこそまさに「精進料理」と呼んでいいのではないのでしょうか。

3

私たちの生命は矛盾に満ちています。生命が生命として成り立つためには自己と他者を厳格に区別し、他者を排除しなければなりません。要するに生体の免疫システムがこれに当たります。よく使われる「自己不二」などの宗教的スローガンとは裏腹に、私たちの生命は自己と非自己を峻別して他を排除する仕組みのうえに維持されています。

殺生するなかれとの戒めは確かにありますが、先述したように、私たちは食として他のものの生命を奪わずには自分たちの体を養い活動のエネルギーを得ることはできません。そのために、牛や豚を屠殺したり、稲や野菜を刈り取ったりしなければなりません。

あるいは、医療現場ではさかんに抗菌薬が使われています。仏教的に考えれば、ばい菌などの微生物もみな尊い生命ということになるはずですが、人間の生命を脅かすという理由で、抗生物質を投与して殺菌したり、あるいはそれ以上増殖することができないように

標的となる微生物の生存を抑え込んでいこうとします。そのためとくにウイルスなどは巧みに変異して人間側の攻撃の手をかくぐり、人と微生物との攻防は果てるところがない現状ですが、どれもこれもみな生命の実相なのです。

こういったことを静かに慮るにつけ、昔、祖父が私に鶏を屠って見せてくれたあの光景がまじまじと蘇ってくることを覚えます。祖父に直接聞いたわけでもありませんから、その真意についての確証はないのですが、同じ人間でありながら敵と味方に分かれて殺戮し合う戦争の血なまぐさい修羅場をくぐり抜け、晩年はひたすら大地を耕し沖に漁りながら自然とともに生きる日々の中で、祖父は祖父なりの生命観や死生観を培っていったのではないのでしょうか。それは必ずしも仏典の聖句や先哲の教えなどに拠るものではありませんでしたが、それだけに自分も含めた生きとし生ける生命のぎりぎりの真実を、おそらく直接経験的に把握していたのではないかと思うのです。

いくら世界平和や自他不二を唱えても、私たちの存在の根源には他を峻別し排除するという生命原理が厳格としてはたらいしています。いくら高らかに生命の世界を謳歌しようとも、私たちの衣食住は他の生命の犠牲のうえに支えられてしか成り立ちません。仏教者の私たちはそういった生命の大本のところを自らの目で今いちどじっくりと見つめ直し、自らの体験を通してそのありのままの真実に新たな仏性の花を咲かせていく営みを怠ってはなりません。

将来は仏門に進むことになる孫の私のために、祖父が特別に用意してくれた「いのちの授業」。あの夏の経験は三十年以上の年月を超えて、僧としての私に大きな気づきをもたらしてくれたのでした。

(つづく)

寺院紀行

東京・町田

勝楽寺

撮影／タカオカ邦彦

文／真山剛



山門から見る勝楽寺。奥に見えるのが無量寿の塔。右手奥の屋根が本堂、手前が庫裡。

「衆生救済、これが仏教の目的のひとつ。そのためには自ら弱者の中に自分の身を常に置かなくては。お釈迦さまも法然上人も実践している。人間だから衆な方に身を置きたがる、でも坊さんなら苦の方の身を置かないと。もっともらしいことを言っても、実践しないで高みの見物では誰もついて来なくなる」

朝からの取材が夕方を迎え、最後の質問に茂田真澄住職は、ひときわ力強い声でこう答えてくれた。

さて、今回訪れたのは新宿から小田急線で約30分、人口なんと43万人余という東京を代表するベッドタウン町田市で、JR町田駅から歩いて5分という街中のお寺、勝楽寺である。平成20年に平成仏塔建立、翌年に本堂の伽藍落慶を行なって生まれ変わった新伽藍と整備された境内が迎えてくれた。そして、話を伺ったのは三寶山紹隆院勝楽寺第34世、茂田真澄住職である。

この名前を聞いて、あるNGOの名前が浮かんだ方がいるかもしれない。1993年に世界の貧困や不正、人権擁護などに取り組むNGOを応援するNGOとして、宗派を超えて仏教者が集まって設立したアユス仏教国際協力ネットワークである。茂田住職はその発起人であり、設立以来理事長を務め、かつ現場で動き続けている。仏教の目指す衆生救済を茂田住職はこのお寺をベースにしたN



昭和36年の道路計画で、境内が3つに分割されることとなった勝楽寺。本町田への移転案もあったが、バブル崩壊で移転は自然消滅した。

GO活動で行なってきたが、それをこの新生勝楽寺で具現化した。

勝楽寺は今を遡ることおよそ50年前、東京オリンピックを控えた昭和36年の町田市計画道路で境内が3分割されることになった。当時の計画道路は住民の意思は全く反映されず、線を引かれたら最後、立ち退くしかない。とはいえ、予定が実施されるには長い年月を要することが少なくない。東京の新橋では戦後すぐに予定されたマツカーサー道路と呼ばれるアメリカ大使館に延びる道路が、平成22年の今まさに建設中なのをみてもわかる。

「計画道路に伴い本町田への寺院移転の話もあった。広い境内の大きな寺になる計画で、それはそれで移転計画を考えるのも楽しかったけれど、バブルがはじけて自然消滅した」という紆余曲折を経ながら、平成18年には町田計画道路は着手されていく。

境内の中を十字に道路が通るのだから大変だ。伽藍はもちろん三百余の墓地の移転も容易なことではない。しかし幸いなことに檀家の多くはこの町田を開拓した当時の旧家で、しかも商家が多い。道路の新設や拡張は地域発展につながるだけに、茂田住職共々ちゃんと対応し、どういい形で整備するかで思いは一致した。

町田市、そして東京都とも交渉を重ねてまとまった補償金に一部境内地を売却して財政基盤とし、檀信徒からは寄付を集めることなく新伽藍着工となる。だが、茂田住職には新たな思いがあった。そ

本堂地下の誕生殿。多目的に利用できる空間で、正面には誕生仏が祀られている。



れは、お墓の需要に応えるロッカー式納骨堂の新設だ。

というのも、人口が増え続ける町田市では墓の需要は右肩上がり。計画道路予定地となった勝楽寺では新たに墓を増やすことができず、今までに1500軒もの檀家申し込みを断ってきたからだ。時代のニーズにあった墓なら欲しい人はいる。ロッカー式の墓はすでに都市近郊の寺院では珍しくないが、境内地が大幅に減るなかではこれしかない。同じロッカー式でもみんなが望むものにしよう。墓を求める側が何を求めているのか？ 大仏塔「無量寿の塔」の案内パンフレットにある「勝楽寺からのご提案」がその答えだ。

◇生前購入の解約は全額返金いたします。

◇寄付をお願いすることはありません。

◇承継者がいなくてもお引き受けします。

◇戒名を自分で付けられます。

◇ペットも一緒に眠れます。

地上9階、地下1階の納骨塔の2階から9階には個人壇（二霊まで）と代々壇（五霊まで）が合計1344基設置され、個人壇は20年契約で80万円、代々壇は30年契約で180万円。費用には契約年数までの管理費等のすべてが含まれ、さらに後継者の有無や戒名、ペットという墓が欲しい人たちの気がかりになることを明らかにしている。説明会も住職がすべて受け答え、資料を配るのは家族で、

舍利堂隣の蓮華殿には大厨子蓮華文舍利容器が飾られているが、これも三橋國民氏の作品。



業者には一切頼らない。住職自らの説明に参加者は安心する。すでに800基以上となった契約が納骨塔建立の成功を証明している。

また、今は「このお寺はここらと命の相談所」という浄土宗が各寺院に配っている看板に変えたが、茂田住職は平成8年に住職になって以来、何でも相談を行なっている。これまでに数え切れない人の相談にのった。もちろん助けられなかった人も何人かいる。

さらに檀信徒の葬儀も全部自分で手配する。葬儀社、火葬場、そして仕出し屋まですべてに関わる。葬儀をする家の経済状況や故人への想いといった細かいニュアンスを汲み取り、一番いい形で葬儀を行なってもらいたいからだ。

とにかく何でも自分でやる住職なのである。その中でたくさんの本音が耳に入ってくる。今度の無量寿の塔の案内パンフレットのキヤッチフレーズは「人々の心に耳を傾け、人々の想いを形にします」だが、これが茂田住職のモットーに違いない。

この茂田住職の感覚の良さや視線の低さは、先代である父の影響が大きい。先代、茂田文雄住職は福井県敦賀市の浄土宗寺院西光寺の4男として生まれ、大正大学卒業後いくつものお寺に随身し、勝楽寺第32世茂田良賢住職の娘さんと結婚する。一年に二百日以上を保護司などの奉仕活動に充て、地域では信頼のあつ住職で、地元の人々からも一目置かれ、檀信徒からも好かれる人格者だったとい



本堂外陣の襖絵(下)、本堂前の灯籠(左)も三橋國民氏の作品で右側の襖絵は龍を描いたもの。三橋氏の作品は大本山増上寺や他の浄土宗寺院、曹洞宗大本山永平寺など、多くの寺院に納められている。



う。とにかくよく働き、寺以外のことで寄付を集めても予定以上に集まった。人柄にお金が集まり、社会に還元されていく。その背中を見続けていたのが、茂田住職である。

また、子育ての方針は「好きなことをする」で、茂田住職の兄は好きな鳥の世界に入り鳥類研究家になった。弟の茂田住職は小学校二年生頃から映画のとりこになり、賽銭箱からお金を盗んでは映画館に通い、「ウエストサイドストーリー」や「アラビアのロレンス」は百回以上も観たし、日活アクション、文芸作品、東映マンガとあらゆるジャンルの映画を観た。大のミュージカル好きで、当時は他にも認める日本一のミュージカル通だったという。余談だが、娘さんが今ミュージカルにはまっているという。

「中高の頃の夢は映画のプロデューサーで、映画で人に生きる力を与えたいと思っていた。大学に入ると映画は道具であり、仏教でも人に力を与えられると、先代には寺の後を継げとは一度も言わなかったが、自から寺を継ぐ意志が固まった」と僧侶の道を選ぶ。

そして浄土宗青年会でのカンボジア難民の募金で社会活動に目覚める。自分がどこにあるかも知らないカンボジアへの街頭募金で、4時間で7万円というお金が集まった。僧侶の姿に信頼や信用があることに気が付かされた。そして、実際にカンボジアを訪れ、難民の現実を見た。寺をベースにした衆生救済活動を始めることになる。



勝楽寺から町田駅に向かう商店街。檀家総代の三橋家をはじめ、勝楽寺の檀家には商家が多い。昔は駅に向かう道すがらの商店のほとんどが檀家で、駅まで住職は挨拶のしつぱなだったという。

以来、いつでも目線を衆生の中におき、他の為に尽くす住職を檀家はどう見ているのか。勝楽寺の檀家総代を務める三橋國民さんのお宅を訪ねた。

「私の父はそれはお寺さんには尽くした人だね。もともと信心深い人ではあったけれど、先代や先々代を信頼していた。今の住職も同じように人間的魅力があるね」

こういう三橋さんは町田を代表する芸術家で、日展の参与などの肩書きを持つ造形美術の大家。90歳になる現在もその旺盛な創作活動は衰えることを知らない。

「三橋さんがいてくれたから、この整備も上手くいった。もちろん数え切れないほどの作品を寄進してもらったけれど、それ以上に貴重なアドバイスをもらっている。」

ここで、勝楽寺の歴史をひも解いてみよう。1573年源蓮社光誉上人開山、三橋新右衛門開基で、八王子の古刹極楽寺の末寺として創建された。近江の出である三橋家が足利幕下、上杉家の御家人として鎌倉へ下向し居を構えたが、戦に明け暮れる武士から一族合意のもと帰農、相之原と呼ばれるまぐさ場だったこの地を開拓、開村し、数年後に菩提寺を作った。それが勝楽寺で、寺名は三橋新右衛門の戒名、寺紋も隅きり三。また、本尊阿弥陀如来も胎内文書から元禄時代に三橋家が招いた本尊であることがわかっている。そし



勝楽寺歴代住職の墓。本堂からは道路を越えた飛び地になった墓地にある。

て平成の無量寿の塔の上には三橋さんの作品である相輪が燦然と輝いている。開山以来、400年以上も持ちつ持たれつという良い関係を保ち続けている檀家と菩提寺というのも珍しいだろう。

町田の歴史を調べると、三橋の名前が度々出てくる。江戸時代に賑わった勝楽寺門前の二六の市、明治時代に八王子と横浜を結ぶ絹の道として敷かれた八浜線（現JR横浜線）の原町田駅の誘致、最近の小田急線とJR横浜線の町田駅新設にも関わられているだろう。とにかく今の町田を拓き育ててきた名家のひとつが三橋家である。

最後に面白いエピソードを。

院号の戒名はいくらですかときく新しい檀家に住職はこう言う。「院号は菩提寺や社会、または国や世界に貢献、奉仕した人に授けられるもの。お金で買えません」、それでも欲しがると、そういう活動をしている団体にそれなりの額を寄付して下さい。

寄付などしたことが無く、そのあてもないから「住職どこか御存知ですか？」と尋ねられる。そこでアユスを紹介する。こうしてそれなりのお金がだせる人の戒名料で世界の子供たちが救われることになる。もちろんお寺には一銭も入らない。それが茂田住職の奉仕であり、貢献でもあり、茂田住職ならではの衆生救済の方法である。

（ルポライター）

明治の廃仏棄釈のときに勝楽寺檀家が大山の寺から勝楽寺に移した不動明王。現在は庫裡に一部にそのお堂が組み込まれている。昔はお不動さまの日には屋台が並んで大いに賑わった。



小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第十六回

足立文太郎と娘婿
井上靖 その1



遥かなるストラスブール

昭和二六年（一九五一）二月に放送されたNHKラジオ番組「光を掲げた人々、新しい時代の聖者、渡辺海旭」は、海旭ゆかりの多くの人々に久方ぶりに海旭を想い起こさせたが、それからなんと三七年もたつてから、遠い異国の地で、ラジオ番組の冒頭エピソード——海旭の海外留学仲間との交歓を反芻する老境の大作家がいた。

大作家とは、「敦煌」「天平の薨」など西域をテーマにした歴史小説で知られる井上靖。ところは戦争前はドイツ領でいまはフランス領となったアルザス地方の古都、ストラスブールである。

井上は、一七世紀に建学されたという伝統にふさわしい荘厳なたたずまいのストラスブール大学本部を見上げながら、ふーっと深いため息をつく、ひとしきり感慨にふけった。——いまから百年前、近代日本の青雲時代に、ここで岳父は渡辺海旭と親交をふかめたのか

...

岳父とは足立文太郎。近代日本の解剖学の草分けで、足立は医学、海旭は比較宗教学と分野は異なるが、ここストラスブール大学で共に学んだ留学生仲間だった。

ジフテリアと破傷風の血清療法を編み出した北里柴三郎、赤痢菌を発見した志賀潔、梅毒の原因であるスピロヘータパリーダの培養に成功した野口英世など、近代日本は国際的な医学者を輩出したが、井上の岳父・足立文太郎も血管系の解剖研究によってドイツ赤十字名誉章、ドイツ最高学会会員に推薦されるなど、彼らと比肩しうる学問的業績を上げた。しかし、研究分野が地味であることに加え、論文のほとんどがドイツ語で書かれ、さらに活動時期が「戦時」にかかって敗戦の直前に死去したこともあって、日本ではいまも無名に近いが、平時であつたらノーベル医学賞はまちがいなく受賞していたといわれる逸材であつた。

——それにしても、岳父と渡辺海旭ゆかりの

ストラスプールは遠かった。やっところれた
：

井上の中にストラスプールという地名が強く
わだかまるようになってから、半世紀以上
がたっていた。そして、八十になった井上
に
ようよう彼の地を訪れる機会がめぐってきた
のだった。二年前、日仏両国の間で、文化交
流の一環として日本の優れた短編と詩を六十
篇ほど選び翻訳出版しようという企画が持ち
上がり、その完成を祝って記念のシンポジウ
ムがフランスで催されることになり、井上は
妻のふみと長女の浦城いくよを同伴して、大
江健三郎や佐伯彰一らと渡仏。日仏文化関係
者によるパーティやシンポジウムなどがもた
れたが、その後、井上はぜひ独仏国境の古都
訪問をその旅程に加えるように希望し、実現
したのである。

井上はすでに岳父の享年を一歳超えてい
た。五年前から痛をわずらっており、この機
を逸したらもうこれないという思いがあつ
たのかもしれない。井上の中に、これほどス

トラスプールをわだかませたものは、結婚
したての井上が生前の岳父から見せられた世
にも不思議な「証文」だった。

世にも奇なる

「屍体贈呈の覚書」

それは、百年前、ストラスプールという遠
い異国の地で、足立と海旭との間で交わされ
た「屍体贈呈の覚書」で、その文面は以下の
とおりだった。

一、予が死後の屍体は之を足立文太郎君に贈
る蓋同寓三載餘同君が学に力むるのを至
れるに感ずるあり予が衷心の尊敬を同君
に表するの榮を得むことを欲すればなり
予が親戚乃朋友等は一切之に對して抗議
するを得ず

一、予は吾骨骸軟部等の保存に關して毫も希
望する所あらず之を粉碎するも焼棄する
も一に同君の意志に任す屍体取扱の如き
も斷じて特別の待遇を要せず窮民の遺体

刑餘の残骸と同一の取扱を得ば足れり

一、官機臓器骨骼等若し世に伝へて後学を裨益するに足るものあらば其保存因より之を妨げず之を外国の標本と交換するが如きも亦不可なし

一、屍体解剖の主任者若くは局部材料の使用者は足立君が認めて適當となす人は何人にも同君より其権利を取得すべし

一、足立君予に先ちて死亡したる時は同君が朋友若くは門下の中同君の意志に由りて此覚書の権利を承継する得此場合には該承継者は其姓名を予に通知あるを要す

一、予は予が死後屍体の贈致と共に若干の金円を之に添付せんとす少くとも石鹼一箇手巾一枚入浴費及醇良の酒三四合の代金を添付せんことを期す執刀事に従せんし後入浴一番少く陶然たるの快あらんことを欲すれば也

明治三十六年十一月三十日足立君和蘭ライデン府を経て帰朝する前二日独立エルサス州ストラスボルクに於て

渡邊海旭 印

現住地東京市深川区御船蔵前町十一番地西光

寺

足立文太郎君

実際に昭和八年に海旭がなくなつたときに、この証文は実行された。当時新聞にも大きく報道されたが、足立の母校である東京帝国大学医学部で、恩師の小金井良精らの立会いのもと、足立も解剖に参加。海旭の脳はかなり重く、夏目漱石と匹敵するほどだったと岳父から聞かされたのを井上は印象深く覚えていた。

岳父へのオマージュとしての 芥川賞受賞第一作

この「証文」と「証文の実行」は、井上の文学者魂を大きくゆすつたが、それが「発動」するのは、不幸な戦争が終わつて五年後の昭和二年、井上が四三歳で念願の芥川賞を受賞、受賞第一作として「文学界」に発表された「由良のシャクナゲ」においてである。こ



渡辺海旭が足立文太郎と共に留学したストラスブール大学

れは岳父をモデルにした作品で、そのなかに渡辺海旭と交わしたエピソードが次のように差し挟まれた。

「彼はわしより少し年長の、サンスクリットをやはりライデン博物館で研究している風変わりな僧侶であった。酒仙という言葉がそっくり当てはまる飄々たる彼の酒の飲みっぷりがわしは好きであった。そのくせ、幾ら酒を飲んでも彼の頭の中には研究のことばかりが詰まっていた。わしは彼の研究がいかなるものであったか知らなかったし、彼もまた、わしの研究がいかなるものであったか知る筈はなかった。しかしわしら二人は意気投合した。学問の貴さを知り、学徒としての二人の人格を互いに尊敬し合うことにおいて、肝胆相照した。わしがライデンを引き上げる時、谷尾海月はわしへの贈物として、自分の持っている最上のものを与えようと思うが、何を望むかと言った。わしは君が死んだ時、死体を解剖させよと言った。

海月は即座に半紙に筆を走らせ、己が死体を解剖学者三池俊太郎に与えるという遺言を自分のとわしのと二通認め、自分のには「親族かれこれ争うべからず」というような文句を記した。」

なお、三池俊太郎のモデルは岳父、谷尾海月のモデルは海旭であるが、二人の留学先はストラスブルではなくオランダのライデンに脚色されている。

この芥川賞受賞第一作は岳父へのオマージュであった。

井上には、作家の登竜門である芥川賞を突破できたのは岳父の励ましがあったからだという強い想いがあった。受賞したときすでに岳父はなくなっていたから、その想いはなおさらである。井上にとって足立は「尊崇の人」だった。偉大なる学者というより、偉大なる学者でありながら、医者から文学という軟弱な世界へ迷いこんだ井上に娘をとつがせ、はげましてくれたからだ。

足立からは「人生は急ぐ事はない。お前は、きつと日本一の大家になる。」とはげまされ、井上あての手紙の最後には、必ず「懸命不動」と書き添えられていた。

また、妻のふみからは、父からこう言われて結婚をすすめられたと聞かされて、岳父への尊崇の念を一層強くしたものだ。

「文士という仕事はおもしろいが、極貧であるかもしれない。だが、おまえならついていける。普通の人が集まるところは、それなりにいいだろう。だが、池の鯉でも一つの魅にあつまれば、一匹の食べられる量はいかほどでもない。ありつけない者もある。しかし、離れたところでほかの者が気づかない魅を見つけた鯉は悠々と食べることができる」

ワインセラーで カムフラージュされた解剖室

井上たち一行は、大学関係者に医学部（正式名は卒業生である大細菌学者の名を冠してパスツール研究所だと教えられた）の校内へ

と案内された。大きな執務室の壁には足立の写真が飾っており、ドイツ語で書かれた大部の論考は立派な赤い皮で表装され、今も講義に使われていると聞いて、妻のふみと娘のいくよが誇らしげに頷くのを、井上は満足げに眺めた。ついで当時足立が学生たちに講義をしたという階段教室に誘われた。そこからは百四十メートルのわびさびた尖塔をいただくストラスブールのシンボルであるノートルダム大聖堂を遠くに見晴らすことができた。

たしか岳父は海旭と大学近くのアパートで共同生活をしていて、そこからも尖塔がよく見えた、あれがあるから酒に酔っても道に迷わず下宿に帰れたと聞かされたことを思い出した。何時しか案内人たちの声が間遠いになり、井上は回想にひたっていた。

岳父と海旭は、酒を飲み交わしながら大いに議論をし、その中で「屍体贈呈」の話が成約したのだろうか。と、芥川賞受賞第一作に岳父と海旭が交わした「証文」をエピソードとして挿入するときの戸惑いがふっと浮んで

きた。

岳父から聞かされたときは、たしかに小説よりも奇なりの事実に仰天もし、創作魂を刺戟もされた。しかし、なぜか、そのまま書き込むのがためらわれた。武士道小説の逸話ならともかくも、近代日本の夜明けの悩める知識人のそれとしては、いささか前時代的に感じたからだ。だから、エピソードはできるだけ軽くさらりと書き流したうえに、海旭がモデルの谷尾海月がなくなったときに「証文」は実行されなかったことにした。あの違和感はなんだったのだろうか。そんな疑念が去来したところへ、長女のいくよから声がかかった。

「お父様、これから足立のおじいさまが仕事をされた解剖室に案内していただけるそうよ……」

井上は我に返った。この先ですと、誘われたところはなんと大きなワインセラーだった。ここアルサス・ロレーヌ地方はワインの一大産地で、逸品がならんでいた。なぜワインセ

ラーがこんなところにあるのかと井上はいぶかった。

と、その奥に石造りの小部屋が隠されていた。上を指差されて見上げると、天井に穴があいている。説明によると、死刑が執行された死体がここから投げ込まれ、それを岳父はありがたく拝領して解剖をしていたのだという。ストラスブール大学当局はその学問的意義を認めて、このようなカムフラージュをしたのであろう。

井上に作家魂がむらむらと湧いてきた。やおらノートを取り出すと、この小部屋の片隅まで往復しては、その歩数を書き込み、そこにメモを書き加えた。頭の中に、投げ込まれた刑死者の屍体と格闘している岳父の姿がはつきりと浮びあがった。解剖を終えて石の小部屋から芳醇の香りがたどようワインセラーへ抜け出ると、体中に染み付いた死臭が一層きわだってさぞ悩まされたことだろう。岳父は洋食党だがなぜかワインは好まず日本酒党だったのはそのせいだったのかと思いが



渡辺海旭が寄宿していたと思われるアパート

ら、井上の疑念は氷解した。岳父と海旭との「死体贈呈」は前時代の約束などではなかった。おそらく海旭は、岳父から、いかに解剖のための死体の入手が困難か。また近代医学の発展のためには一体でも多くの死体を解剖することがいかに必要なかを諄諄と聞かされたのだろう。相手は殺生を好まぬ僧侶である。その海旭が親友の別離に臨んで自らの死体の提供を申し出た。これは前近代的な「餞別」などではない。その背後には、ともに近代日本を背負わんとする明治人のあい寄る近代的魂があったのではないか。

もしあのときこの小部屋を見ていたら、あの程度の小品のなかの一挿話ではなく、岳父と海旭のエピソードを真ん中にすえた作品に

仕上げて、岳父と岳父の無二の友であった海旭へのオマージュとすることができたのにと、井上は大いに悔やんだ。

さらに案内人から、岳父がシュバイツァーと同期で解剖にも付き合った可能性があると聞かされて、だったら足立文太郎と渡辺海旭とシュバイツァーとは深い親交があったのではないか、いやシュバイツァーは牧師でもあったことを考えると、医者、足立と宗教家の海旭との間を親密にしたのはシュバイツァーの可能性がある、そんなひらめきが閃光のごとく湧いた。もう一度描きなおしてみたいという想いが、井上のなかでにわかに募るのだ。

(この項つづく)

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒114 東京都台東区元浅草4-22の1

電話(03)3842-1228
9
振替00180-245231

連載

会いたい人 関 容子

桂米團治さん ③



撮影／タカオカ邦彦

米團治さんのクラシック音楽への傾倒は、仕事で出会ったソプラノ歌手との結婚につながる。同志社大学の女子音楽学部出身で、喜歌劇楽友協会に所属する彼女がヨハン・シュトラウスのオペレッタ『こうもり』のしたたかながら可憐な娘イーダを歌ったとき、米團治さんは刑務所の看守フロツシュ（台詞だけの役）に招かれて客演したからだ。

「さこば兄さんもレハールのオペレッタ『メリー・ウイドウ』に佐渡裕さん指揮で出演なさってますし、ぼくはラジオのレギュラー番組で知り合った井上道義さんとたちまち意気投合して、ストラヴィンスキーの音楽劇『兵士の物語』に井上さんの指揮で出演したりしています。そういう関連から『こうもり』にも出たわけですが……以来、そのソプラノ歌手の尻に敷かれてます（笑）」

米團治さんは二十代のころ、映画やテレビにもかなり出演していて、中でも強く私の印象に残っているのは、市川崑監督の『細雪』。

出てくるだけでいかにも船場のぼんぼんらしかった。

「四女妙子のお相手の啓ぼんの役ですね。関西の独特の雰囲気を持つ若者を探していまして、ぼくが監督のお目に留まったらしいんです。台本をもらってうちに帰ったら、親父が、お前、できるんかいな、ちよつと見せてみい、と言うなり、いきなり指導を始めて、『こいさん、今度ぼく、パリへ行くこうと思うんやけど』、ほら、言うてみい、って（笑）。それで古手川祐子さんを相手に『こいさん、今度ぼく……』と、やり出したら、監督のストツブがかかって、君、どうしてそんなクサイ言い方するの？ って。まさか米朝に教えてもらった、とは言えませんかね。これが親父不信の第一歩です（笑）。とにかく映画は座ってしゃべる落語と違って、立って動きながらしゃべりますし、タバコをすったりお茶を飲んだりするのも、落語は扇子や手拭を使って表現しますが、映画は実際にそれをしなく

米朝師匠(右)、故枝雀兄さん(中)と。
平成5年9月3日隠岐島にて。(「子米朝」より)



ちゃんならない。なまじ落語の動きが身につき出したころだけに、これが結構むずかしかったですね」

しかし結果は上々で、市川監督は『おはん』にも米團治さんを起用しているし、その後NHK朝の連続テレビ小説『心はいつもラムネ色』にも出演している。

「あのときは藤山直美さんが漫才のミヤコ蝶々さんの役で、ぼくが相手の南都雄二さんの役でした。これもぼくにとって大変な勉強になりました」

米團治さんが「それにつけても……」と思いを馳せるのは、この世界へ入る道を開いてくれた兄弟子、枝雀さんのことだ。

「嘶家になるあと押しをしてくださった方で

すからな。それがなかったら嘶家にならずにいたかもしれない。嘶家の息子って、興味はあってもなかなか言い出しにくいものなんです。枝雀兄さんにも二人の息子さんがおられて、落語が好きみたいやし、あるいは私があと押しをするべきだったのかもしれないけども、遠慮も責任もあつてちよつと言えなかった。だから、ぼくも、枝雀兄さんが『行こ！』とハッパをかけてくださらなかったら、さこば兄さん言い出しにくかったと思う。父も、二人があんまり言うんで仕方なく、という形で決まったんで、本当にそのおかげなんですよ」

去年の暮れ、桂枝雀の（生きていれば）七十歳の誕生日を祝う催しが各地を巡演し、私は上野鈴本に出かけた。一門とゲストによる座談会に、体操の金メダリスト森末慎二さんが出て、亡くなる少し前の枝雀さんが広々としたガラス張りの二階の部屋にポツンと座っている姿が外から見えて、思い出しても心が

痛む、と話していた。

「枝雀さんの家の二階は公園が見渡せるんで、逆に公園からも中の様子が見えるんですよ。兄さんはひどい鬱状態で、ぼくは何回も伺って、こうこうですから、何を言っても、すんませんな、ほんまにすんません、とぼくにも敬語を使って小さくなつておられました。親父が心配して見舞いに行つて、枝雀、一杯いこ、一杯いこ、飲んでくれ、つて。向うが乗つてこないんで、あのな、酒というのはな、こうやつて飲まないかんのや、さ、ついであれ。枝雀さんがつぐといっきに飲んで、さ、受けてくれ、つて。こんな調子でうちの親父がペロペロになつてしまつて、枝雀さんはほとんど飲まなかった。あのときあんなことあったな、こんなこともあったがな、と昔のこと言つて盛り上げて、いや、米朝は自分だけ一生懸命なんですよ。相手の話を聞くんじやなくて、なあおい、まあまあまあ、と酒をすすめて、飲みたないつて言うてるのに、

飲んでくれ、って懇願してね。それから何週間もしないで、枝雀さんは自ら命を絶ってしまわれました」

米團治さんの語るその場の光景は、さすがに米朝さん生き写しの口調でありありと目に浮かぶ。米朝さんは一番弟子の死をどう受け止めたのだろう。

「えらいことになったがな、と言って茫然としてましたね。言葉が見つからなかったんだと思います。しかしうちの親父は、死ぬことと生きることの差をあまり感じてないようなところもあるんです。自分の父親が神職だったということもあるのか、神の『親みたま』からわれわれは『分けみたま』となつて人間の形で生まれてきて、寿命がつきると肉体が減びるだけで魂はまた親みたまのほうに戻る、という考え方。仏教は輪廻転生やし、キリスト教も天国のイエス様の元へ召されるし、考えたら道のりは違えど、真理はみんな同じなのかもしれないね」

米朝さんのこの死生観が米團治さんになんとなくわかったのは、こんなときだった。

「先代米團治師匠のお弟子で桂米之助という方があって、すぐ上の兄弟子なので親父とは無二の親友でした。大阪の古いことをよく知ってはったので、ぼくがわからないことがあると、すぐ悦ッちゃん（本名〓矢倉悦夫）とこ行け、って言われるくらい、親父とは親しい間柄でした。それで父がちょうど大阪のホテルプラザのマルコポーロというバーで飲んでるときに米之助師匠の訃報が入って、ぼくが伝えに行くと、ビール飲みながらメニューを見てた。『あの、悦ッちゃん師匠、お亡くなりになりました』『えっ？ 悦ッちゃん死んだか……そうか、（店員に向かつて）サイロスティーキー（笑）』。兄弟子が死んだことと、今自分が食べるものが同等なんですよ。人間の死をあまり悲しまない。というより、悲しみをあまり口にしながらない。そら寿命やないか、という感じなんですな。」

ひょっとしたら枝雀もまだどこかで生きてる
と思ってるフシがあつて、酒飲んでてまだど
こかに兄ちゃんがいるような感じでしゃべ
って、あ、枝雀はもう死んだんやな、なんて
言う。その人のことを口にするので、その
人が甦るようなことになるんですよ」

落語は最高のバーチャル（仮想空間）の芸
だと思ふ、と言った人もいるけれど。

「バーチャルという言葉にはちよつと抵抗が
ありますけどね。落語の登場人物がそこにい
るわけじゃないけど、お客さんの頭の中にイ
メージさせる芸ですよ。その点、父は非常
に落語的な生き方をしているな、と思いまし
た」

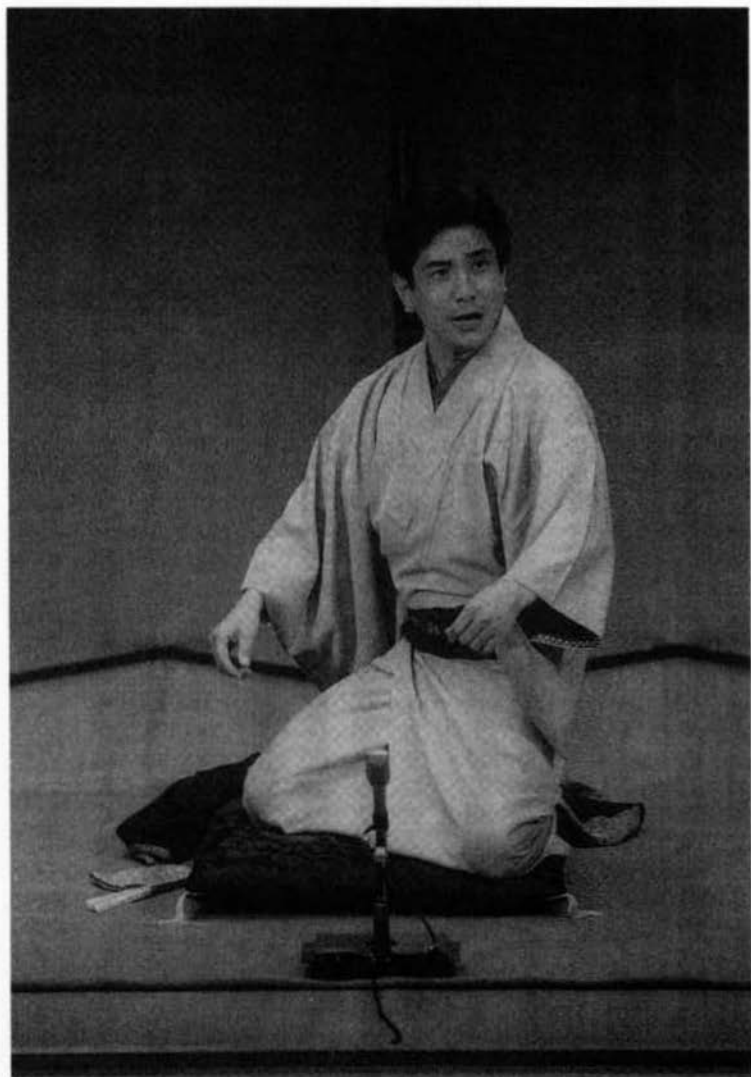
今回、米團治さんに会って話を聞いたのは、
これからル・テアトル銀座で『景清』を口演
する前の時間だった。

「この噺は作爲的で、現実から離れすぎてる
と思うんですよ。夢物語で、目の見えない方

に夢を与えるように結局叶わないんじゃない
がなと思つて、ぼくは『景清』をやらなかつ
た。ところが、前にこぶ平時代の林家正蔵
さんがやるのを横で聞いてて、主人公とこぶ
ちゃんのひたむきさがオーバラップしてき
て、感激して泣いてしまいました。こぶ平さ
んの一途な思いがその人物をスツとおろして
きて、自分と同化させてしまった。すると会
場がその男の一点にシューツと収斂した。そ
ういう瞬間があつたんです。これを聞いた途
端に、『景清』つて噺は夢でいいんだ、夢で
もこんな素晴らしい夢があるんだ、と思つて、
それを聞いてから彼ほどのひたむきさはない
けどぼくにもできるかもしれない、という気
になつて、今日これからやるんです」

米團治さんの物ごとをみごとに分析して語
る鮮やかさにはうっとりさせられる。まるで
コンサート会場で音楽を聴いているみたい
だ。

「ぼく米團治は単なる演奏家じゃなくて、も



「七段目」大阪・池田アゼリアホール。平成9年10月30日。撮影／宮崎金次郎

う一人の指揮者米團治に操られながらしゃべってるんです。その呼吸が狂ったらバラバラになります。指揮者はオーケストラの連中が酒飲みに行ってる間も部屋で譜面とにらめっこで、孤独な作業をしますよね。このフエルマータはどれくらい延ばすかとか、このフォルテはどのくらい強くするかとか。そのかわりその演奏の評判がよかったら、プレイヤー以上に指揮者の地位がアップします。嘶家も構成や演出を考える自分の指揮者の評判がよかったら上に上がるけど、ダメやったらゼロになりますからね。こうんなに幅がありますよ。それは誰が決めるかと言えば、お客さんが決めるんです。笑いと感動と拍手の量で決まるんです」

米團治さんの『稽古屋』や『七段目』が、「踊りすぎる」「演じすぎる」と忠告してくれる先輩がいるというが、まだまだ米團治さんの若さでは、あの花やかで派手で色っぽい芸風を、指揮者が抑えこまないほうがいいよう

に思う。

「落語と芝居は違うんやから、ええテキストがあるんやから、その通りに淡々としゃべったらええんや、という御意見をいただくことがあつて、この教えはこれからのぼくの課題です。人の欠点は誰もなかなか言ってくれませんが、言うてもらったことでまた別の個性が加わったら、さらに大きくなれるかもしれない。有難く、聞く耳を持たないといけない、と思つてます」

米團治さんの今後の多彩な活躍が楽しみです。「落語に限らず、舞台人としていろいろ挑戦したいです。ぼく、舞台という魔物がえらく好きでね。一つ間違えれば本当に怖い悪魔になるんだけど、時に大きく成長させてくれますからね。これにとりつかれたら、ちょっとやめられまへんわ」

(おわり)

阿弥陀ほとけの御ちかいには、有智無智をもえらばず、持戒破戒をもきらわず、仏前仏後の衆生をもえらばず、在家出家の人をもきらわず、念仏往生の誓願は平等の慈悲に住しておこし給いたる事にて候えば、人をきらう事は、またく候わぬなり。されば観無量寿経には、仏心と者大慈悲是なりと説きて候なり。

法然上人【津戸三郎へつかはす御返事（九月二十八日付）】

阿弥陀さまのお誓いは智慧のある人も智慧のない人をも選り好みせず、戒律を守れる人も守れない人も嫌うことなく、またお釈迦さまのいらつしやつた時代の人、入滅された後の時代の人も選り好まず、在家、出家の違いを分けへだてることもなく、念仏往生の誓願はあらゆる人々への平等の慈悲の御心から発されたのですから、人を分け隔てるなどということは決してないのです。『観無量寿経』に「仏心とは大慈悲これなり」と説かれている通りです。

アゲハが舞うころ　　平等の覚悟

今シーズン、初めてアゲハチョウが空を舞う姿を見たのは、確か五月二十一日のことであつたと思う。その日が命日の仏さんのお参りに、お檀家さんの家に行く途中、目の前を飛び去っていったのだ。アゲハが気になるのは、アゲハに興味があるからではない。じつは家人がアゲハの飼育に凝つたことがあるのだ。ある年のこと、それはまず、卵を見つけるところから始まつた。

アゲハは山椒の葉に卵を産み付ける。幼虫になつた時、その葉を食べるからだ。山椒の臭いや味がたぶん天敵除けになるのを見越しているのだろう。家人は、庭の山椒の木を毎日チェックし、卵の有無を確認した。卵を見つけると、それが幼虫になるまで見守り、鳥が見つけそうな大きさになつたところで、枝ごと幼虫を採集。あとは花瓶に山椒の枝を挿して適当な箱に入れ家の中に持ち込み飼育が始まつた。幼虫が山椒の葉を食べ尽くせば、新しい枝に取り替え、幼虫を引っ越しさせる。糞の始末をしながら、何度か脱皮を繰り返す幼虫の成長を観察し、サナギになるのを待つたのである。

この間、どのくらいだつたろうか。私には憶えがないが、家人の最大の関心事はサナギがアゲハになる瞬間、つまり孵化する場面である。それが見たいから育てるのである。しかも孵化した時にちゃんと羽が開くよう、サナギにな

る場所へ誘導もしてやるのだ。

その時は、たしか五、六匹の幼虫を育てていたと思う。サナギになるタイミングがどうだったのか私には分からないが、どうやら家人はサナギのまま冬を越させようとしたらしい。自然界ではあることだ。しかし、その目論見ははずれてしまった。これから寒さが増すという時、サナギはアゲハになり、家人は心配そうにアゲハを空に放した。

じつは家人にはさらなる心配事があった。それは行方不明の幼虫がいたことだ。サナギになる直前、一匹脱走したのである。家の中のどこかでサナギになっているにしても、無事に羽が広がる場所で孵化してくれるかどうか心配だったのだ。

心配は的中した。しばらくして、部屋の中に一羽のアゲハが現れた。部屋の隅のカーテンをよじ登っている。傘を閉じたようなしわしわの羽。たぶんカーテンとサッシの間で孵化していまい、羽がサッシに邪魔され広がりがらなかったのだ。これでは空に放つこともできない。脱脂綿に砂糖水を含ませ、吸わせるくらいしかしてやれなかった。吸わせるためにアゲハを捕まえる。羽を持つて脱脂綿にしがみつかせる。鱗粉が取れ、次第に羽がボロボロになった。やが

て静かに死んだが、成虫としての寿命近くまでは生きたいらしい。

何であれ、物事にはアクシデントや計算違いは付きものだろう。目論見より早くサナギになる。幼虫が脱走する。もちろん家人は卵から無事アゲハにして青空に放してやりたかった。しかし、どれだけ慈しんだとしても、私たちの思いが実らない時はある。

平等の慈悲に住する。阿弥陀さまにとっての平等とは、掲げるべき理想の段階ではすでになかろう。現実の問題なのだ。あらゆるアクシデントを想定し、あらかじめ計算違いが起こりうることも考慮し、それらにいかに対処するか解決済みでなければ、平等の慈悲に住することなどできるはずもない。たぶん何度も何度も失敗を繰り返し返し、その都度切ない思いをして何度も努力をし直し、これでもう絶対に大丈夫という確信を得られたのだろう。大慈悲の大には、もう失敗は許されないという覚悟が込められていると思うのだ。

舞い飛ぶアゲハを見る時、家人のことを思う。今度はいつ卵を採ってくるのだろうか。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

シリーズV

法然上人を
めぐる人々

熊谷直実

第三回

の
回心

石丸晶子

挿画・鈴木奈緒

七

「どないしたん。えらい慌てて」。通と蓮が戸口を振りかえつて同時にいった。

「あんたら聞こえへんかったか。いま表はえらい騒ぎやで」と弥太は、

「源氏のお侍やかとお侍やったとかいう大男が、表に押しかけとるねん」

「表では間もなう法然さまのご法話がはじまるのんとちがうか。」通がいった。

蓮もつづいて、

「そういうたらさつき表のほうで騒ぎ声がしたようやったけど、わてらこっちの話で気にとられてたさかい」

「表は騒いどるで」と阿波の介もくりかえして、

「わては道遍さんらに手伝うて庭にお集まりの方々を誘導してたんや。そしたら大男が馬で乗りつけて来よつてな」

「何やねん、そのお侍。失礼やないか」。蓮

が憤って怒鳴った。

「ここをどこやと思うとるねん。摂政関白さまかて法然さまのところには吉水の坂の下で駕籠を降りて上がつて来はるのに」

「源氏のお侍は礼儀知らずが多いからな」。通はそういうと、

「そんでどうなったんや」

「どうなったんも、こうなったんもあらへん。庭にお集まりの方々を退けてな。庭の隅に大きい公孫樹の樹があるやろ。あの樹に馬を繋いで、あとはそこ退けそこ退けや」。阿波の介は両腕で周囲を掻きわけける仕草をした。

「何ちゆう無礼な」

「そのお侍の勢いに押されてや、集まった方々はわあツと隅に散つてお侍の前に道がでけた」

「ひどいなあ」

「わては傍で見とつたんやけどな。お侍は出来たその道を周りの人ちゆうもんには目もくれんで、堂々と一人で草庵の戸口に向かいよ

石丸昌子



った。あつという間やったわ」。弥太がいった。

「何やえらそうに」

悔しそうに蓮がいった

「何しに來たんやろ」

不安そうに通はいう。

「お頼み申す。お頼み申す。言うてな。それ

もう大声でわめきよったわ」

「名前は名乗らんかったんか」

「何や喚いとったわ。何とかいうて喚いとったな」

そういうと弥太は阿波の介を振りかえつた。

阿波の介は、

「何せ大声で喚きたてとったからな。よう聞きとれんかったけど、熊谷が何とか言うてたわ。平家の公達がどうしたの、須磨の浦がどうしたのこうしたのかもいうて喚きたてとった」

といって、

「草庵の戸口でああいっぺんに喚かれては、

何言うとか、誰も分からへんがな。道遍さんが慌ててそのお侍んとこに駆けつけなざったんをみて、わてはあんたらに知らせなあかん思うてな。弥太と一緒に急いでこっちに來たんや」

八

それから一刻（2時間）ほど後、そのお侍すなわち熊谷次郎直実くまがいじろうなおさねは、草庵の居間で大きな体を縮めるようにして法然上人と向かい合っていた。体を縮めるようにしてはいるものの、どこかまだ荒い息遣いである。

「熊谷殿のことはよく覚えております。あれは寿永三年でありましたか。わたくしは熊谷殿のお迎えをうけて、三位殿のおられる堀川の御堂へまいりました」

畏まっている直実をみて法然上人の頬には微笑がひろがっている。

一の谷で源氏に生け捕られ、都に連行され

て堀川の御堂に幽閉された本三位平重衡は、

今更ながら南都焼き打ちの重罪に慄いて法然上人に懺悔することを願ったのであった。懺悔の許しを後白河法皇から下された義経は、そこで直実を迎えの使者に立てて、吉水の草庵に法然上人を迎えにやったのである。

「あれからもう十年が経ちます。多くの方々 が亡くなられたが、熊谷殿はいかがお過ごしであつたか。東国に帰られたと伺つておりましたが」。法然上人はいった。

「……」。一瞬の沈黙の後、直実は口を開いて、「われらはお上人様を師僧と思つております。法然上人様が高德の聖であられますことは、先の合戦でわれらが都におりました間中から聞きおよんでおりました。思いみますれば、お上人様とわれらとは少なからぬ因縁がございます」

自分でも一体何を言っているのか分からなかったが、分からぬままに直実は口を開いた。口を開くと次から次へと言いたいことが一氣

に直実の口を突いて出た。

「われらは昨年、武士に嫌気がさして東国の故郷を出奔いたしました。ございます。まこと侍ほど情けないものはございませぬ」

法然上人にお目にかかれたら、こうご挨拶申し上げて弟子入りをお願いしよう。積年のわが思いをこう言うところから切り出してお話ししたい。

吉水への道々、馬の背に鞭打ちながら彼はそうくりかえし考えてきていた。しかし、いざ法然上人に対面してみると、直実の頭のなかには真つ白になっていて、どういう順序でお話するのであつたか全く浮かんでこないのである。

「—さぞ、お辛いことがおありになったのであろう」。温かい眼差しを直実に向けて法然上人はうなずかれる。

「叔父に騙されましてございます」

わめき声になっていた。

「叔父も武蔵国熊谷郷の武士にございます

が、梶原景時と通じておりまして、われらは二人に嵌められたのでございます」。片方の手の拳を握り締め、もう一方の手で涙がにじむ目を拭いながら直実はいった。

「鎌倉殿の前で行われた裁判にもわれらは負けましてございます」

「おお、それはたいへんでございました。労わりに満ちた眼差しで法然上人は言った。

直実は無骨な手でくやし涙を押しぬぐいながら、

「非はすべて叔父にあるにもかかわらず、鎌倉殿は叔父に軍配を挙げただけではありません。流鏑馬のときには、平家との合戦で手柄を立てたわれらを、射手にせず的に立てとされた」

「……」。無言のうちに、痛ましそうに法然上人は直実をみつめた。

と、直実はつづけて、

「的立てなど、侍がするものではありません。下人、下人のすることです……」

直実は呻いた。

九

長年抑えに抑えてきた憤りが、聞いてくれる相手をみつけて一挙にあふれだし、心に鬱積する恨みつらみを何の前後の説明もなしに法然上人に向かって爆発させる直実が、なおも言い募ろうとするのをみてうしろに控えていた道蓮が、

「お上人様、実は熊谷殿と私とは先の合戦で



は義経殿の配下におりましたところから、互いに顔見知りでございました。先ほどこちらにお見えになった熊谷殿を見ておどろいた次第でございます。お上人様の法話が終るまで熊谷殿からいろいろお話を聞いていたのでございますが」

といって直実が話す領地争いと裁判のことで、そして流鏑馬の一件の補足をした。それによると……

流鏑馬の事件が起こったのは平家が壇ノ浦に沈んでから二年余りたった文治三年（一一八七）八月。

このとき、頼朝は鶴岡八幡宮で放生会ほしやうえを催し、そこで流鏑馬が行われたのである。グラウンドを馬で駆けながら射手は的に向かって矢を射るが、的を持って歩く的立ては徒歩であった。当時、鎌倉で馬に乗って通行できるのは武士だけであり、徒歩は下人や従者の行儀であった。

頼朝はこのときの流鏑馬で、直実に徒歩で

移動する立的立ての役を命じたのである。

もともと流鏑馬は、歩くのが下人・従者である、というこの規定に依らない行事ではあった。しかし、他の武士が射手として馬で駆けてゆくのに、自分は的を持って歩くということは、直実にとっては耐えがたい恥辱であったのである。かつて頼朝は源平合戦で奮闘した彼を「天下無双の勇士」と称賛したではなかったか。

武士の誇りを傷つけられた直実は、断然、「承うけたまわること能あたはず」、といって頼朝の命令を拒絶した。

が、下した命令を拒絶された頼朝は怒った。そして直実の所領の一部を召しあげ、それを鶴岡八幡宮に献納したのである。

また直実が領地のことで叔父久下直光くげなおみつと争い、裁判にまで持ち越された事件が起こったのは、流鏑馬事件の五年後、建久三年（一一九二）十一月であった。

そもその事の発端は、直実が義経の配下

として西国で平家と戦っていたさなか、彼が自分の領地にいいことをさいわい、直実の領地の一部を直光が掠めとったことにある。直光は直実が帰国した後も、本来の持ち主である直実に返そうとはしなかった。

直実と直光、二人は何度話し合っても埒があかない。直実が西国から国許に帰ったのは文治元年（一一八五）であるから、以来七年もの間、甥と叔父は争ったあけく、ついに頼朝の前で裁判が開かれることになったのである。

建久三年（一一九二）十一月であった。

実は直光は頼朝の口達者な寵臣梶原景時とかねてより通じあい、裏工作をしていたのである。裏工作をして準備万端整った上で裁判に持ちこみ、トラブルつづきの領地を正々堂々自分のものにしてしまおうと企んでいたのであった。

裁判当日、そうとは知らぬ直実は「正義はわれにあり」と幕府に出かけた。

が、戦場の勇士ではあっても口下手な直実は、たちまち直光方に言い負かされてしまう。裁判の進行具合をみて、愚直といえは愚直な直実もさすがに気がついた。景時がさかに叔父の肩をもってまくし立て、直実の立場はどんな不利になってゆくのである。

（おかしい。裏で叔父は梶原と示しあわせていたんだ！）

怒り心頭に達した直実は、

「茶番じゃ。茶番の裁判じゃ。何が鎌倉殿よ。聞いてられるか」

とわめきながら裁判のために用意された書類を頼朝の御簾のなかに投げいれた。

そして別室で髻を切ると怒りにまかせてそのまま逐電。京都に向かおうと歩きはじめたが……

「侍の世界ほど汚いところはありません」。自分に代わって道遍が説明してくれるのを聞きながら、直実はふたたび呻いた。

（つづく）

暑中御見舞申し上げます

平成二十二年 盛夏

浄土門主

総本山知恩院門跡第八十七世

坪井俊映

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山 百萬遍知恩寺
法主

服部法丸

〒606 825 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山清浄華院

法主 伊藤唯眞
執事長 吉川文雄

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六・十七・十九

浄土宗宗務総長

里見法雄

法然上人御誕生地

美作 誕生寺

〒709 302 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八) 二二〇二
FAX 〇八六七 (二八) 二一六二

函館 称名寺

〒040 0055 函館市船見町十八・十四
電話 〇一三八 (三三) 〇五七四

暑中御見舞申し上げます

平成二十二年 盛夏

(学)大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174-8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園

理事長

麻生諦善

淑徳S.C.中等部・高等部

校長

大島謙

塩竈市

雲上寺

東海林良雲

本應寺

熊谷靖彦

〒844-1411 埼玉市塩田津中町

学校法人佛教教育学園
学校法人東海学園

理事長 水谷幸正

大鹿山弘経寺住職

金田進徳

〒302-0023 茨城県取手市白山二・九・二八

愚鈍院 こつぶがや文庫主

中村瑞貴

〒984-0051 仙台市若林区新寺三・十二・十七

吞龍上人祈願所

十八機林霊場会

蓮馨寺

住職 糸原恒久

〒350-0066 川越市連雀町七・一
電話〇四九(二二二)〇〇四三
FAX〇四九(二二二)〇六七六

養蓮寺

田中光成

〒194-0032 町田市本町田三六五四

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107-0052 東京都港区赤坂四・三・五
電話〇三(三三八)二二六三〇

暑中御見舞申し上げます

平成二十二年 盛夏

明福寺

福井豊信

〒132-0013 江戸川区江戸川三・八・一

鶏頭山安楽寺

飯田實雄

〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五(八三)一三三六〇

清水泰

忠高山
實相寺

〒420-0839 静岡市葵区鷹匠
二丁目二四番十八号

玉桂山
華陽院

電話〇五四(二五二)三六七三
FAX〇五四(二五二)三六五六

勝願寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八(五四一)〇二二七

お骨仏の寺

一心寺

〒543-0062 大阪市天王寺区達板二・八・六九
電話〇六(六七七)〇四四四

白本尊阿弥陀如来

静岡
宝台院

住職 野上智徳

〒112-0002 東京都文京区

小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

定義如来

極楽山
西方寺

〒989-2113 仙台市青葉区大倉字上下一
電話〇二二(三九九)二二〇一一
Homepage: <http://www.johgfor.jp/>
E-mail: sahouji@johgfor.jp

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

暑中御見舞申し上げます
平成二十二年 盛夏

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158-0083

世田谷区奥沢七、四一、三
住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004

品川区南品川二、一、二二

大吉寺住職

成田昌憲

〒154-0017

世田谷区世田谷四、七、九

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38

電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四、二、二八
電話 〇四六七 (二三) 〇七〇三
FAX 〇四六七 (二三) 五〇五一

貞松院住職

山田和雄

〒392-0004 諏訪市諏訪二、一六、二二
電話 〇二六六 (五二) 一九七〇
FAX 〇二六六 (五二) 三四四六

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002

文京区小石川四、二二、八

光取寺

大室了皓

〒141-0021 東京都品川区上大崎一、五、一〇
電話 〇三 (三四四) 八三八四



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では、

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●罪

〔特選〕桜咲く沢庵禪師流罪の地

佐藤 雅子

沢庵は理不尽な罪により出羽に流され、五年ばかりを過ごした。それを示す何かが残っているのかどうか。桜はあとで植えたものだろうか。ただその木は、そめいよしののような低俗なものでないことを願いたい。

〔佳作〕罪と罰読む緑蔭のハンモック

河合富美枝

青葉風読めぬ文字ある流罪の碑

園田亜由美

罪と罰読み了えて夏来たりけり

増田 信子

●底

〔特選〕川底に産卵終えし鮭ぼろぼろ

石原 新

海で大きく育った鮭は、秋になると生まれ、上流の砂底に産卵する。鮭の一生はここで終わり、底に沈んだり岸辺に横

〔特選〕

海光の軒に揺れいる燕の巢

●自由題

たわつて、鳥の餌になったりする。「ぼろぼろ」は、まさにその様子そのものである。

〔佳作〕

底なしに遊びふざけて子等の春

工藤 浄真

すり鉢の底ひんやりと夏近し

山内 桃児

谷底は仄かに暗し梅雨の月

浜口 佳春

燕村は「十便十宜」の一枚に、壁に映る池面の揺らぎを見事にとらえている。この句は軒に映る海面の揺らぎである。軒裏には燕の巢があつて、今卵を抱いている。あるいは子燕が親を待っているのだろうか。

〔佳作〕

人っ子はひとり私の滝の音

内藤 隼人

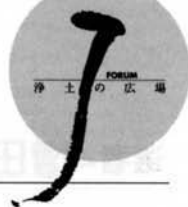
いぬふぐり寂と漁村の昼深し

池田 伊吹

妻の愚痴聞く春眠の夢の中

寺下 忠至

佐藤 ゆう



浄土誌上句会の お知らせ

兼題
季節ではありません

風紋 自由題

誌上句会〈編集部選〉

■罪

罪のなき子らのえがおや春の空
蝦蛄食って大罪ひとつ重ねたる
罪深き我に五月の来たりけり
天つ罪ほろほろ風の八重桜
半島の罪あるかたち夏きざす
門々に罪を説く札昭和の日
罪作る小猫を撫でて春障子
夕の膳罪なきとじよう生きたまま
ときめきは微罪でしょうか夏来たる
すでに罪生まれて今朝の谷若葉

工藤浄真
斉田 仁
小林苑を
目黒 裕
内藤準人
新島朱音
井村善也
山口信子
水野由佳
仁科雄一

締切・二〇一〇年八月二十日

発表・『浄土』二〇一〇年十月号

選者・増田河郎子〔南風〕主宰

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■底

川底に足触れし子ら声躍る
水底に浮ぶ綿雲夏柳
水底は太陽の色五月来る
親指に音叉のあるえ春の底
底引き網透けて白子の耀けり
かたまつて深き水底春の鯉
川底の澄みいて鮎の群れ上る
春の猫闇の底より戻り来し
漬け樽の底暗かりし半夏生

■自由題

己が身を川面に映し鯉幟
草笛に答へてをりぬ山鴉
残雪のまだら模様以利尻富士
春昼のお揚げが浮いているうどん
葬儀社の戸口の脇の熱帯魚
欠伸して皺伸ばしたり鯉のぼり
春愁い音叉のように道分かれ
蝶生れて長さを競うつけまつげ
弁当の銀紙ほどに囀れり
三列に最中が並び暮の春
魚焼く正午の煙夏来たる
藤棚の香に立ち止まる寺の庭
切株の芽立ちすくすく急斜面

佐藤雅子
河合富美枝
工藤浄真
斉田 仁
月島恭子
山内桃児
笠井亜子
中嶋いづる
西原規夫
目黒 裕
小林苑を
山口信子
石原 新

さっちゃんねネッ

かまち♡ひろう



すみませんの言葉ばかりの桜桃忌 岱潤

今年刊行された阿刀田高氏の『イソップを知っていますか』という本を読んだ。この話もイソップなのかと思うほど、実に様々な話が紹介されていて驚いた。毛利元就の三本の矢の話や、親子で年老いた馬を売りに行くときの話、財産や肉體や親族を妻に替える話など、中国の故事や、根本仏教の阿含經典と思っていた話などが、次々に登場してびっくりしてしまっ

この話は、安土桃山時代に日本語に翻訳された『イソップのハブラス』と、古活字本『伊曾保物語』をもとに、百三十余

りの話を紹介したものだ。イソップ寓話の変遷を考える意味でも面白いものだった。しかし寓話は寓話でしかなく、「大人のための人生の処方箋」などと帯に書かれているのには、違和感を覚えた。映画監督でも知られる森達也氏は、子供のころからイソップ寓話の後に必ず添えられる先生の教訓談を「うざったい」の一言でバツサリ切っているが、この本でも下心として必ず一言教訓が添えてあることにお話の後に解釈として教訓を強要されると、それで嫌になってしまふものだ。それにしてもイソップという紀元前六世紀のギリシャの人の語った話が、世界

中を駆け巡ったと想像すると、面白い。キリスト教やイスラム教の文化圏、インドや中国、そして日本。寓話はさまざまに変遷して伝わっていったのだろうか。

(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤寛道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十六巻七八月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十二年六月二十日

発行 平成二十二年七月一日

発行人

編集人

佐藤良純
大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三)五七八六九四七

FAX 〇三(三)五七八六九四七

振替 〇〇一八〇八・八二二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
鮎 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

凡ぼん有ぬ三さん輩ばい

凡そ三種の輩あり
無量寿經

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

およそ三種類の人あり。

芥川龍之介の短編「孤独地獄」。はなとら放蕩三昧の僧が吉原で身を持ち崩した理を語り、いま孤独地獄にいと打ち明けます。自分は出家して家族や友人から別離した。修行は厳しく悟りの境地に達していないので覚者の仲間にも入れず、孤独で寂しいと言うのです。私は、孤独の原因は主体性の欠如だと思います。

人生では、私たちはいろいろな人に出会います。

世には、自分を支える人、批判する人、無関心な人があり、いずれも大切な人。なぜなら、この三種の人と係わりあつて、自分が成長するからです。人は個性があり、それを他者がどう見るかで、三種類の対応の人が目の前にいるのです。支えてくれる人に甘えず、批判する人の声に耳を傾け、無関心な人に声をかける、主体性が必要です。

法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より